

平成 30 年度

## 北近畿地域連携センター研究助成（地域研究プロジェクト）

### 採択課題研究成果報告書

研究課題名：交流観光による農村活性化の研究-中国成都での事例を中心に  
研究代表者（申請者）：平野 真（本学教授）  
共同研究者：張 明軍（本学助教）、劉 鳳（中国西南交通大学教授）、  
中尾 誠二（本学教授）、渋谷 節子（星槎大学教授）  
研究経費：30万円

#### 研究成果の概要：

中国四川省成都市の近郊の農村の視察を行い、中国の農村振興策の代表例としての「農家楽」の開発の現状と課題を探った。調査対象としては、以下の4つの農村とし、それぞれ現地での訪問調査とヒヤリング、および文献調査を行った。

- 1) 竹里道明村：村固有の自然資源である竹を中心に、様々な竹製品の開発で飛躍的發展を遂げた。
- 2) 幸福公社による開発地域：多様な製品開発を特にデザインに注目して進めた。
- 3) 三聖花郷（五金花農園）村：花卉産業の導入とこれに伴い花園観光を展開し、さらに都市の企業資本を導入して一大リゾート地域の開発に成功した。
- 4) 明月村：古典的な農業と伝統的な陶芸、そして外部から移住した若い芸術家たちの活動という3つを上手く調和させた。

調査の結果、日本の農業の6次化では、農業と加工業や小売りなど産業での連携が主であるが、中国の場合、これに文化や住民の歴史、芸術などを組み合わせ、効果的に地域の固有価値を観光や特産物生産に結びつけていた。その基礎として、一方で外部の人や文化に対してもオープンに受け入れ、過去の村の文化と外部の人が持ってきた文化と、尊重しあいうまく融合しながら、村の発展に結びつけるということが行われていた。

こうした芸術・文化を農村振興へ結びつける手法の日中比較という観点から、徳島県神山町についても訪問調査を行い、比較検討を行った。その結果、神山町の場合、外部の人や文化をオープンに受け入れ、村の発展に結びつけることは明月村などとも類似していたが、従来の経済志向の枠組みの中で町の持続性を志向するものではなく、むしろ非資本主義的なスローライフ志向の町を新たに創造しようとする動きのようであり、基本的には都会の資本主義的経済発展をベースにしながら、補完的な活動をしているものと考えられた。ある意味では成熟期に入った資本主義社会の都市補完型のまちづくりとして位置づけられる。

中国の明月村が、こうした日本での動きも視野に入れながら、従来型の農村振興ではなく、近未来での持続可能性を意識した共生型コミュニティのようなものを志向していると

したら、さらにそのまちづくりの過程や工夫は、日本にとっても大きなインパクトを持つものとなる可能性がある。今後、こうした観点から、より詳細な調査と住民意識の解析などが必要である。

## 1. 研究開始当初の背景

2009年に、平野は当時日本に留学していた劉とともに中国内陸部成都近郊の農村五金花村集落の現地調査を行い、その結果を論文化して、日本の経営学では最高峰と言われる組織科学（学術誌）に投稿し受理掲載された（平野真・劉鳳「クグローバル連携による地域事業価値創出過程」組織科学 Vol.43No.3\_33-42(2010)、添付資料参照）。それは、酸性の痩せた土地で極貧であった農村を、若い女性の村長が巧みな経営術で観光地化し、飛躍的な経済発展を遂げた事象の分析であった。

2017年に、平野と張は、再び同地を訪れ、その発展のさらなる進展に驚いた。おそらくは外部からの資金流入も加わって、驚異的な発展を遂げていた同地域を観察し、さらなる発展の原因を詳細に調査したいと思ったことが、本研究の動機である。

この一連の農村開発は、日本における「道の駅」や「農家民泊」の源流とも言われるいわゆる「農家楽」とも関連しており、農家楽発祥の地といわれる成都近郊は、農村の観光導入による経済発展のヒントを探る上で非常に適した研究対象と言える。本研究では、中国の地域問題の専門家としての劉鳳教授、そして日本の農家民泊や農村問題に造詣の深い中尾、さらにベトナムなど東南アジアの農村問題に造詣の深い渋谷が共同研究者として加わることにより、中国と日本、およびアジアの農村比較を行いながら、農村の開発問題を分析していくこととした。

## 2. 研究の目的、先行研究レビュー

1990年代以降の鄧小平氏の改革開放路線により、中国が世界の工場として工業・製造業を中心に飛躍的に経済発展したのは誰もが知るところである。中国は2000年代に入り、驚異的な経済発展を遂げ、いまや世界の大国として君臨するようになった。しかし現在、約14億人と言われる中国の人口の約半分は農村で暮らす農民と言われ、年収1億円以上の富裕層も200万人以上いると言われる中国において、依然として多くの農民は年収30万円にも満たない極貧にあるとも言われている。鄧小平氏の掲げた「先富主義（先に豊かになれるものから豊かになる）」の弊害として、中国社会の中での格差増大が顕在化し、2000年代の胡錦濤政権下では、いわゆる三農問題（農村、農民、農業の課題）の克服が大きくクローズアップされてきた。

中国の農村問題は、日本とは歴史的経緯も、スケール感も、大きく異なる。しかし近年における高度経済成長を背景とした中国での農村振興は目をみはるものがあり学ぶべき点も非常に多い。本研究では、その中国の農村の視察と調査を行い、農家楽により農村がどのように発展したか、また中国との比較の中から、日本の農村問題がどのように見えてくるのか考察する。

周知のように、中国での開放政策は、当初、沿岸部の経済特区などを中心に行われ、鄧小平の「先富（先に豊かになれるものからどんどん豊かになれ）」優遇政策によって沿岸部と内陸部ないし都市部と農村部の経済格差は著しく広がった。しかし、胡錦濤国家主席、温家宝首相の時代になり、取り残されてきた農村部や内陸部の格差是正は大きな政策課題となり、「先富」政策は「共同富裕（みんなで豊かになろう）」政策に変わり格差の是正に向かった。そうした努力の一環として、内陸部の成都という都市の周辺に位置する五金花農園と呼ばれる農村での驚異的な経済成長が知られている。

平野は、10年ほど前に、当時日本の大学の博士後期課程に留学していた劉鳳氏（現・中国西南交通大学教授）とともに、この農園の現地調査を行い、研究結果を論文化している。

成都市郊外にある五金花農園という行政地域は、16平方キロの領域に広がる五つの自然村落から成るものである。もともと地質的には酸性土壌であることから通常の農業には不利な場所であり、人々の暮らしは本当に貧しいものであった。しかし、この地で野菜栽培や生花栽培を行なうことを始め、しかも「花」を核として観光や家庭菜園などの新規事業を起すことで、この村落は飛躍的な経済発展を遂げた。「花」を核とした各種事業展開により、以前は貧しかった農村がわずか数年のうちに数倍から十倍近い収入を得る地域として変貌していったのである。その後、五つの村は、蓮、菊、スモモ、野菜、生花といった特色を出しながら夫々に全体の「五金花」村落を構成するようになった。それぞれの村で、菊、スモモなどといったテーマの花を決めて花園を形成することで、季節ごとにつねにどこかの村で花が咲いているように全体設計したのである。そして生花ビジネスだけでなく、都市部の人々への家庭菜園の提供、観光対象としてレストランやホテルなどの周辺ビジネスを勢力的に展開した。考えてみれば、この村落は地理的には二つの大きな国道の間に位置しており、都市部への入り口にあるという地の利の良さから、都市へ向かう人々あるいは都市部からの観光には適した郊外であったといえる。更にその後、各村にそれぞれ異なる個性の美術館を建設し、村の中に芸術家の居住地域を作ってそこに芸術家を呼び寄せて住んでもらい、芸術家の製作した作品を美術館で展示・販売するといったことを行った。これは、更に季節に依存することなく、継続的に観光客を村に呼ぶための巧妙な仕掛け作りといえる。こうした様々な工夫により、五金花農園には次第に全国各地から観光客が押し寄せるようになり、村の繁栄が導かれた。

五金花農園の事業は、日本で言えば農工商連携や農業6次化による農業振興策と一脈通じるところもある。農業だけでなく、サービス産業などと組み合わせることで、農民の事業収益を増やし、農村の経済発展を図ろうという施策である。こうした施策は、三農問題克服の重要な政策として、いわゆる「農家楽」（観光型農園）による農村の貧困脱出策として、胡錦濤政権や四川省行政府によって重視されてきたという。

展（2008）の研究によれば、1980年代から1990年代に四川省を発祥の地として自発的に農家楽が生まれ始め、やがて全国に広がり、2000年代には行政府の政策として積極的に推し進められるようになったという。2005年末で、全省での農家楽は総計約1.7万戸に達し、約24万人の雇用を創出し、約8000万人の観光客を受け入れ、観光による収支額は約25億元に達したとの事である。このうち成都市の農家楽は約5000戸以上で、年間2000万人以上の観光客を受け入れたという。2008年には、中国全土で1万以上の村が農家楽を経

営し、300万人の農民が農家楽で貧困から脱却し、農家楽の経営で、農家は平均数倍近い収入の増加を得ることができた。農家楽の成功の裏には、無論中国全体の経済成長と消費の伸びがあり、1995年に中国政府が週休2日制を制度化して以来、余暇を旅行や娯楽で楽しもうという全国的な消費傾向が、この農家楽ブームをもたらしたとも考えられる。

劉（2013）によれば、改革開放路線後の中国では観光産業を収入源の一つとして重視しており2001年から2015年にかけて中国のGDPは6.9%から14.2%の範囲内で順調に増大し高成長を遂げているが、さらに観光収入については、マイナスに落ち込んだ年もあるものの最大53.5%と成長率がめざましく、2015年には約3.4兆元（GDPは約68兆元）、2016年には約3.9兆元に達するという。2015年の国内観光者数も約41億人と、観光が国内の消費活動としても大きな要素になっていることがわかる。こうした背景の中で、農村振興策としての観光がクルーズアップされているのは理解しやすい。

また桂（2010）によれば、五金花農園に関して、2004年から2008年にかけて、四川省人民政府は約1.8億元（約27億円）を投資して、インフラ整備を行い、また農民への資金援助も積極的に行ったという。2004年から誘致した大企業（花卉産業など）も約2億元の投資をおこなっているという。そして、五金花農園開発資金は、省政府30%、民間企業64%、村の共有資金2%、その他資金4%という比率であるといい、その使い道は、基盤整備40%、社会保険18%、民居改造補助金22%、農業産業補助金11%、農民教育9%とのことである。

こうして中国における農家楽は農村を貧困から救うために大成功した事例のようにも見受けられるが、一方で農家楽の問題点を指摘している研究者もいる。

森下（2008）は、雲南省の事例をあげ、農家楽により成功したものとそうでないものとの格差が生じたこと、農家楽間の競争が激化したこと、外部の農民が流入して農家楽を行うことで村の独自性が失われる場合があることなどを挙げている。

実際に、2017年度に平野と張が成都市五金花農園を訪問した際には、外部の企業の経営する商店や飲食業の店が増え、もはや農村のイメージがなくなっていることに強い印象を受けた。本研究により、その状況をさらに仔細に観察調査することとした。

### 3. 研究の方法

基本は、現地における聞き取り調査や資料分析を中心に、中国での事例研究を行い、それを日本の事例と比較しながら、より普遍的な農村開発の指針を得ていくための足がかりとする。

9月中旬に、平野と張が中国を訪問し、劉とともに現地調査を行う。その結果を持ち帰り、中尾、渋谷等と共に、日本との比較検討を行いながら、分析し、論文化していく。比較検討の事例としては、徳島県神山町の事例を調査する。こうした比較検討を通じて、日本の農村の開発指針や農村を抱える地域としての福知山市の活性化と発展のための指針を得ることを念頭に置く。

また、中国の農村発展モデルとの対比という意味で、日本の事例調査も若干行うこととした。

#### 4. 研究成果と今後の課題

##### (1) 中国での農村調査

2018年9月に、中国四川省成都近郊の4つの農村および農家楽を視察・調査した。4つの村ともに農家楽による経済発展を遂げた点は類似しているが、その発展形態はそれぞれに異なる特質を持っていた。

- a) 竹里道明村：村固有の自然資源である竹を中心に、様々な竹製品の開発で飛躍的発展を遂げた。
- b) 幸福公社による開発地域：多様な製品開発を特にデザインに注目して進めた。
- c) 三聖花郷（五金花農園）村：花卉産業の導入とこれに伴い花園観光を展開し、さらに都市の企業資本を導入して一大リゾート地域の開発に成功した。
- d) 明月村：古典的な農業と伝統的な陶芸、そして外部から移住した若い芸術家たちの活動という3つを上手く調和させた。

##### 1) 道明竹芸村（現地対応者：名誉村長 張永超，30代，女）

###### a) 発展経緯

道明竹芸村は成都市内から40kmの崇州市に位置し、崇州市道明鎮龍黄村第九、十一、十三組で構成されている。第一期企画開発区域は約123ムーで、住民は86世帯で295人である。道明鎮の竹工芸は2000年の歴史を持ち、現在、中国の非物質文化遺産に登録されている。伝統的な竹工芸を伝承し、現代要素を取り入れ、主に立体竹工芸、平面竹工芸、入れ物ケース竹工芸、この三つの体系に分けている。文化遺産の有効利用を狙い、道明竹工芸というブランドを作り出し、道明竹文化を広げるように、文化創新、レジャー、体験の一体化農村観光コミュニティが建設されている。現在、平均日毎に500人以上の利用客を受入れている。





図1.道明竹芸村全貌（崇州市農商文旅体融合發展産業園）

道明竹芸村に対する投資主体は崇州市崇中展業投資有限公司（国有投資企業）（以下は中業投資）である。中業投資は不動産投資、文化観光、工業インフラ整備、商業施設管理を軸とするグループ企業である。

道明竹芸村での取組は三つの中核組織（成都川西林盤専門学校、中業鄉村發展設計院、中業投資）と四つの連盟組織（デザイナー連盟、商業連盟、資本連盟、講師連盟）との連携で行われている。こういった連携で「立案、投資、企画、建設、運営」の総合力を發揮し、農村振興の総合管理人材の育成から、農村振興事業への参与等、多面的に四川省全地域の農村振興に取り込んでいる。

同済大学（上海）の設計チームが唐・陸游の《太平詞》の中‘竹里房椽一径深，静愔愔。乱红飞尽绿成阴，有鸣禽。’からヒントを得られ、道明竹芸村のシンボル建造物【竹里】を設計した。空中から鳥瞰すると、【竹里】の屋根は“∞”の形となり、このデザインで、2017年世界レベルの文化空間設計賞を獲得し、2018年に中国の未来農村づくりのイメージ作品として、ベネツィアで行われた現代アート国際展示会で模型を展示され、世界からの注目を集めた。

【竹里】を建ててから、道明鎮政府は周辺地域を「崇州市農商文旅体融合發展産業園」（以下は産業園）として指定し、【竹里】を中心として、アートIN農村をテーマとし、村づくりをスタートした。2017年9月から、中業投資が産業園に取組むこととし、レストラン、書院、養生コーナー、ホテルなどを建て、文化的空間で観光客をもてなす機能を備えた。また、集落全体を再構築し、野菜畑景観、生活污水处理システム、自然湿地を整備した。

住民は主に、土地、不動産に投資し、あるいは賃貸ビジネスを行う形で村づくりに参加している。レストラン、書院、養生コーナー、竹工芸博物館等は全て、村民の古民家を改築したものである。書院の創始者は詩人であり、作家や詩人等の文学者を連れて、創作ヒントを求めに、よく村に来て短期滞在する。

更に、100名以上の青年詩人、伝統生活美学専門家等を新村民として招いた。海外からの顧客を増やすため、今年5月に海外からのアーティストを招き、道明竹芸村で芸術作品を

作ってもらうイベントを開催した。

また、竹工芸の博物館では、昔の人が使った竹の日常用品と現代風の竹工芸作品を展示し、竹工芸製品の販売、竹工芸体験も行っている。竹工芸の作品は一般的な農家用の箱、箕、帽子などから、現代風の金魚鉢ケース、パンケース、瓶ケース、バック、キーボード等まで、様々である。



図2. 【竹里】の鳥観図



図3. 【竹里】の内部

- 1. 茶席    2. 展示エリア    3. 会議室
- 4. 茶室    5. レストラン
- 6. 来客対応エリア    7. 厨房
- 8. 事務室/荷物預かり所
- 9. 水庭    10. 木庭

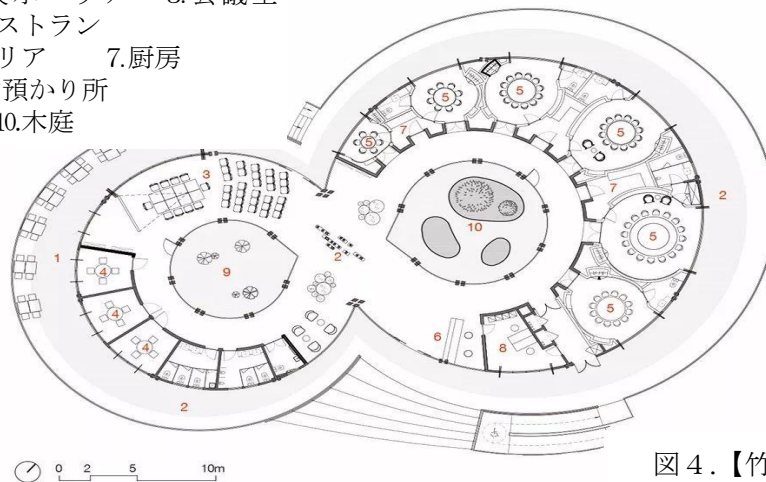


図4. 【竹里】の構造図





図5. 三径書院



図6. レストラン



図7. 竹工芸製品制作風景



図8. 無農薬野菜畑



図9. 竹工芸博物館内展示エリア

現在、市場で流通している道明竹工芸の種類は約4000個、四川省全市場の90%以上の竹製のハコは道明鎮産である。時代に合わせて、道明鎮の若い世代の竹工芸職人は現代のテイストを取り入れ、伝統工芸と現代アートとを融合し、斬新な竹工芸製品を開発し、現代の消費者に受け入れられた。また、美術大学の工芸研究講師を招き、村民に対して、新たな竹工芸の手法、工程を教え、竹工芸の製品の工芸性を高めた。以前、村民の竹工芸製品は比較的荒く、収入にならなかったが、最新の作り方を取り入れた後、製品の芸術価値を高めることができ、収入が大幅に上昇した。従来の農産品だけでなく、家具、竹工芸のおしゃれバック、ライト、茶器、絵等も作成するようになった。



## b) 道明竹芸村の発展の特徴

### ① 竹と芸術との融合

竹芸村は非物質文化遺産の登録をきっかけに、斬新な文化的デザインを竹で表現し、竹工芸製品の市場を広げたため、道明竹芸のブランド効果を強め、村全体の収入を増やせた。

### ② 田園風景の詩をシンボリックな建造物で表現し、田園回帰の理念をアピールした

【竹里】のデザインを周囲の自然環境と融合させ、【竹里】が中心となる竹芸村を休日レジャーランドとしてアピールし、都会に住む人々の田園回帰のニーズを満たした。

### ③ 新村民の募集

国内外のアーティストを対象に、芸術家の目、文化人の心、経営者の頭脳を持っている人を募集し、新村民として、受入れた。

### ④ イノベーションに力を入れる

伝統的な農村観光開発のモデルと比べ、より大胆な改革を行った。竹工芸品の開発、【竹里】の設計と実現、新村民の募集、更に、不動産投資等、農村地域における取組自体にイノベーションを起こした。

### ⑤ 文化遺産の価値を拡大する投資資本、技術、人材、運営組織の育成に注力した。

文化遺産の伝承と村づくりに有利な外部環境を作り出す。「村づくりとコミュニティ運営の基準化」と「芸術の美感と空間設計の基準化」を中核とする原則に基づき、ビジネスチャンスを造ることで、人材育成に力を入れた。人材育成を起点として、竹芸村の文化産業を発達させ、有効的に空間、環境保全、サービス、景観、生態系、人文資源、観光、農業、スローライフの全体を創出した。

### ⑥ 住民との提携関係

村づくりをスタートさせて以来、アンケート調査、訪問等を通じて、一部の村民の理解を得ながら、景観づくりに協力してもらい、村民の家の庭壁の高さ、色、屋根の色、素材等を統一するように改築した。改築費用は、当初は全額自己負担してもらい、その後、月に一定の金額で村民に返金する。当初プロジェクトに参加しなかった村民も村全体が段々綺麗になり、収入も増えることを認識すると、協力するようになった。全村民に対して、タウンミーティングを開き新しい村の魅力を紹介し、村づくりの理念とモデルを認識してもらうようにした。

今年の8月下旬に新たな交流スペースをオープンし、企業のイベントや学校合宿体験等に提供した。更に、中国伝統文化、竹工芸、民俗学、文学交流、絵描き、ダンス、音楽、芸術、田舎生活、野外救命、手作り市等の実践講座を実施した。講師はすべて、村の新住民が担当した。

## 2) 幸福公社（視察対応者：成都銀獅地産公司 CEO 史 御力，40代，男）

2008年四川大震災の後、被災地である大邑县青霞鎮政府が産官連携による復興政策を呼び掛け、成都红色盒子投資有限公司がその政策に応じて、成都銀獅地産公司を設立し、中国の養老、養生と観光不動産投資事業を関係づけ、全国大都会周辺の農村地域に「幸福公社」の産業リンケージを構築することを目指した。

幸福公社は成都市内から高速道路で 2 時間の所に位置する。幸福公社における投資は三段階に分けられる。第一段階は被災地住民向けの復興への投資である。土地を購入し、約 110 ムーの土地に住宅マンションを建てた。建築面積は約 5 万㎡である。これは、約 3300 元/㎡で売買済みである。第二段階は商業用店舗&住宅への投資である。土地面積は約 82 ムー、建築面積は約 6 万㎡である。建築種類は別荘やホテル、手作り商店街であり、現在も販売中である。

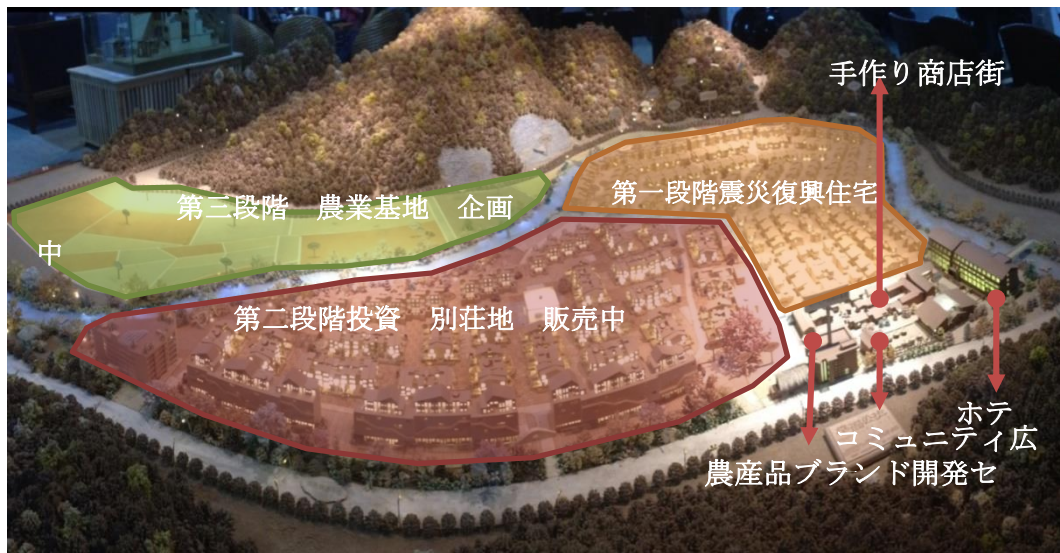


図 10 幸福公社の開発段階イメージ図

第三段階は農業基地への投資である。土地面積は約 130 ムーで、現在企画中である。住宅マンションの建設と共に、体験農場、コミュニティ広場、ジム、図書館、バドミントン練習場、テニスコート、サッカー球場、マウンテンバイクコース、医療保健センターなどの施設の建設も行っている。



図 11 第一段階投資後の幸福公社

地域住民を対象とする具体的な取組み

①住民の起業への支援。

住民による文化芸術関連事業の起業に対して、会社は起業の指導、経営面のサポートなどを行っている。更に、店舗を無償で出店住民に貸して、内装資金の補助などを実施している。

②農産品のブランド化へのサポート。

多くの若者デザイナーを誘致し、地元農家の販路開拓を含めて、四川全域において、農産品のブランド化、市場開拓などに支援を行っている。

③住民による施設の無償利用。

地域住民に宿泊施設、飲食店、ジム、会議室等の公共施設を無償で提供する。

④住民向けのイベント開催

住民向けに、体育祭、芸術祭、民俗講座等を定期的で開催する。住民は無償で参加できる。



図 12 第二段階、リゾート地投資 完成後イメージ図

特徴：

企業参入による農村づくり

官民提携を通じて、民間企業の資本が震災後の村落再建に投入され、企業主導の震災後の村落再建の取組にマーケティング、ブランド構築等の経営手法が導入されたことで、復興活動が速やかに展開され、住民の生活水準が震災前より遥かに高まっている。また、震災によって、消滅した旧農村の文化の復元を目指して、がれきから旧農村の生活に使う道具などを保存し、新農村の建設に活用している。旧農村文化を復元すると共に新しい文化、芸術要素を取り入れ、新農村の文化的価値を上昇させた。文化的価値の上昇の影響で、新農村周辺地域の地価の上昇を実現させた。新農村建設を通じて、農村住民の利益（経済的、文化的）と企業利益の相乗効果を実現できた。

地域外の定年退職者、高齢者をターゲットにして、定住環境を構築するために、農業、観光、芸術、教育、医療、運動、公益活動、宗教、それぞれの要素を融合し、定住誘致の



ビジネスモデルを構成できている。

### 3) 五金花村（三聖花郷）

五金花村は、前述の予備調査の記述でも述べたように、酸性の土壌で農業に向かず、極貧の農村であったが、観光化で飛躍的に発展した有名な地域である。もともと湿地だったところも多く、300年前からレンコン栽培などを行う農家も多かった。当初、女性の村長が米国資本の会社に土地を貸して花の栽培を行わせ、これを村の観光地化が起こり、桂（2010）によれば、五金花村は2004年当時で人口13000人、2008年までの5年間に、農民の平均所得は、約4000元（7万円）からその3倍に増えている。

現在、五金花村の多くのレストラン、ホテルなどの店は、政府からの補助金を受けながら成都市内の企業が運営しているものが多く、特に精華大学卒の企業家の運営するある会社は、かなり広域的に経営を行っているという。こうした店への顧客は、成都だけでなく四川省の人々が多く、経営者も成都のみならず四川省から広く流入しているという。主に、土日の顧客が多く、四川省の人々が大好きな麻雀ができる店が多い。

訪問したあるレストランでは、外国からバラを輸入して飾り、婚約パーティーの会場などとしても運営していた。また、ある木工店では、地元の木材のみならず、やはり外国から国材を輸入してカスタムメイドの高級家具を作り、地域のレストランやホテルに納品するほか、明や清時代の古い家具の修復なども漆の技術を駆使して手がけていた。

現在、村の中に、バスの路線は16もあり、地下鉄の駅もあるという。現在、5つの村全体では観光客が年間1200万人あるという。

村民は、自ら店舗を経営するものもいるが、現在は、土地を貸して、隣接する住宅地に移り住んでいる人が多いという。村全体の急激な経済発展の結果、いまは企業が店舗を運営したり、花を育てている場合も多いという。村の中にある四川省最大の花卉市場を訪問すると、地元市民のみならず国内全域に花を売っており、ここだけで年商7億元（120億円）とのことであったが、これは外部企業の経営である。地元の栽培の花だけでなく、雲南省から花を買ってきて取引もしているという。レンコン栽培と店舗経営を並行する農民もいるが、レンコンの花は6～7月しか咲かないので、冬の観光客が少なく、店舗に集中する場合より年収は悪い。村の全店舗数約310のうち、花関係の店は100ほどだという。

当初、農民の経営教育が功を奏したということが平野・劉の報告にあるが、現在の状況について地元の観光会社説明員が語ったのは、全般的には農民は経営が下手な場合が多く、政府が1km<sup>2</sup>あたり年間160万元（2500万円）程度を農民に給付したり、土地を借りて100%政府の力で運営するケースも多いという。開発は当初は農民の生活向上を目的として政府が支えたが、その後企業が投資するようになり、土地を企業に貸す農民が増えたという。昔はこの土地の出身者であることが恥ずかしく隠す人が多かったが、現在は大金持ちになった人もおり、一番大きい農家樂を経営している人は、年収1000万元（1.7億円）もあるという。普通の農家樂でもその十分の1程度の収入があるという。



図1 3. 三聖花郷（五金花）村のレストラン（婚約パーティーなども行われるという）



図1 4. 左：木工店（外国からの輸入木材も使う、高級家具修復も手がける）  
右：花市場（地元で栽培した花を、外部だけでなく、市民にも売っている、雲南省など外部からの買い付けも行う）

#### 4) 明月村

明月村は、ゆず、桂花、筍、茶、キューイなどの農作物を今でも生産している農村でありながら、300年ほど前から、生活工芸を中心に陶芸技術も発展したという。一時は、製作した陶器の販売でも一定の収入となっていたというが、その後、陶器の価格も下がり販売はあまり振るわなくなっていたという。

しかし、外部の芸術家が村に移り住み、より現代的な陶芸を作りようになったことから、陶器の販売が持ち直したという。そのことで、村の人々も芸術家たちを進んで受け入れるようになり、村の人々と芸術家の共生が始まった。その後、陶芸だけでなく、様々なジャンルの芸術家が村に济むようになり、様々な活動を展開するようになった。ある30代の写真家は、村の生活の記録と村の人々の生活の美しさを表現することで村人の心を元気づけることも意識しているという。この写真家の写真を飾った小さな美術館が建てられ、これも観光に寄与するようになった。現在、陶芸体験や、農業体験などが観光の素材となり、農業・陶芸・観光が調和して村の経済を支えている。外部の若い芸術家の移住によって、村の開発が豊かな発想と町の美化（デザイン化）が持ち込まれ、村の人々の意識も前向き

で学習意欲に富んだものとなっている。村の人々が積極的に陶芸技術を身につけるようにもなった。村人は、外部からやってきた芸術家たちに家を貸しや家賃収入を得、自分たちはマンションに移り住んだりもしているという。芸術家たちが来て、村の観光化（体験陶芸など）が進み、村のブランド化も行われて、村の筍の価格も昔の2倍のkgあたり7元となった。農産物の売り上げも増え、村人たちは芸術家たちに感謝こそすれ、拒否反応は全くなかった。現在、村の名誉村長として活躍する30代の女性も、やはり外部から移住したということだが、日本の新潟県十日町の「大地の芸術祭」なども視察してきており、村の新たな発展に様々なアイデアを出し、これが政府に認められて行政の支援を受けて実現しているという。

2009年の時点では、成都の中でも明月村は貧しい村であり、平均年収は5000元（8万円）以下であったが、現在はその4倍になっている。

現在、村では、「人づくり」を村の基本に据えており、多様な芸術家を尊重している。村の若者たちも、大学などのため一時的には村を出るが、また村に帰ってきて村のために貢献する若者も多く、現在も30人ほどの若者が外部で勉強したのちに村に戻って働いているという。このうち20人は村で起業したという。また芸術家になった人もいるという。現在、村の人口は、約2300であり、現在増加しているという。60歳以上の高齢者は約200人、65歳以上のものは約150人ということである。現在の人口のうち、100人は外部からの移住者（若者だけでない）である。昔は出稼ぎで村から出て行く人が多かったが、村の経済が立ち上がったいまは、出稼ぎで出て行く人はいないという。

村の説明員の解説によれば、繁栄は以下の3点によるところが大きいという。

- 1) 住民の素朴な心
- 2) 女性の名誉村長のリーダーシップ
- 3) 元々の村民と移住者で作る運営チーム

当初は、女性の名誉村長のアイデアが多く、政府の支援を取り付けていたが、現在はトップレベルの方針は政府が立て、具体的な細かいアイデアは村民が出すようになってきている。また最近では、外部のコンサルタントが協力しているという。投資効果などの細かい経済分析はしていないが、農産物のブランド化が進み、以前は地産地消だった地鶏なども現在は外部に売れるようになったという。

村民が感じる村の魅力は、以下の3点であるという。

- 1) エコシステム（自然が豊かで農業が継続している）
- 2) 人の素朴さ（隣同士で助け合う）
- 3) 歴史的遺産（いままでの発展）

こうした様々な産業が共存する村の雰囲気は、日本でいうと、長野県の小布施町や徳島県の神山町などに似ていると感じさせた。





図15. 左：明月村入口 右：観光用バス



図16. 左：豊かな農園 右：陶芸体験教室



図17. 左：村に移住した30代の写真家  
右：写真家の美術館の前で（日中の学生達）

## (2) 中国農村視察のまとめ

日本と中国の地域問題とその解決方法について、類似性と差異を明らかにすることを念頭に、中国四川省成都近郊の4つの農村を大学生とともに視察・調査した。4つの村、とも

に農家楽による経済発展を遂げた点は類似しているが、その発展形態はそれぞれに異なる特質を持っていた。

- a) 村固有の自然資源である竹を中心に、様々な竹製品の開発で飛躍的發展を遂げた竹里道明村。
- b) 多様な製品開発を特にデザインに注目して進めた幸福公社。
- c) 花卉産業の導入とこれに伴い花園観光を展開し、さらに都市の企業資本を導入して一大リゾート地域の開発に成功した三聖花郷（五金花農園）村。
- d) 古典的な農業と伝統的な陶芸、そして外部から移住した若い芸術家たちの活動という3つを上手く調和させた明月村。

こうした先進事例農村の経済発展に関して、日本の農業の6次化では、農業と加工業や小売りなど産業での連携が主であるが、中国の場合、これに文化や住民の歴史、芸術などを組み合わせ、効果的に地域の固有価値を観光や特産物生産に結びつけていた点が興味深い。その基礎としては、一方で外部の人や文化に対してもオープンに受け入れ、過去の村の文化と外部の人が持ってきた文化と、尊重しあいうまく融合しながら、村の発展に結びつけるということが行われていたことがある。

また一方で、幸福公社や五金花農園などで、農民が次第に農業を捨て、土地や不動産を貸すことで生計を立てているという状況も目の当たりにした。これは多くの農民が極貧から抜け出す過程の中では十分理解できるのだが、一方でそれでは人々の求める究極の幸福とは何か、地域の存在意義とは何か、といった観点で疑問がわからないわけではない。日本では、若者の都市への移動による農村の過疎化が問題となっているが、農村自体の都市化も、また別の現象のようであり、実は根本的に産業が収益率の悪い農業から商業や観光業、工業へと移っていく問題としては同じメカニズムを持っている。そこでこの問題は深く掘り下げていくと、いわゆる「まちづくり」と産業の関わりをどうとらえるのか、といったより根源的な問題提起にもつながっていく。

非常に興味深かったのは、中国における農村活性化としてはベンチマーク的な存在として知られる五金花村であった。この村の調査から得られた知見をもとに、この村の経済発展についてまとめると、以下のような点があげられる。

- a) 農民は、いわば農業の6次化である農家楽（観光、商業）の導入により、極貧から救われた
- b) その「地域」は経済発展し、所得も生活水準も著しく向上した。一方で、一部の農民は収益性の悪い農業からは撤退し、完全に観光、商業により生計を立てる者が増えた。また豊かになったとはいえ、政府や企業に土地を貸すだけになっている人もいる。
- c) 結果として、現在この村には、地理的人口流出、過疎高齢化、インフラ崩壊、産業崩壊

などの日本の典型的な「地域問題」は存在しない

- d) しかし地域の農業人口は激減し、村の人間関係もかなり失われているようにうかがわれる（村全体が都市化した）。

無論、この村の以前の状況からすればこうした経済発展は奇跡に近いことであり、当然農民にとって素晴らしいことであり、あえて批判めいたことなど述べるつもりは全くない。また、中国の大学関係者が強調していたのは、現在の姿が理想なのではなく、あくまで長期的な発展を考えたときの過渡期に過ぎないという点であり、将来的な村のイメージについてはかなり長期的な視点で考えねばならないという。当然、現在7億人以上いる貧しい農民の存在という国政としての状況も考える必要がある。成都市全体あるいは四川省全体、あるいは中国全体の農業政策の中でこの村をどう位置付けているか、といった点はまだ調査できていないので、安易な物言いはできないが、観光や小売による経済発展が成功すればするほど、一方で地球全体の中での農業という産業の保持や、持続可能な「地球（社会）」との関係性を考えた時、いろいろ考えさせるものもあるように感じた村であった。他の村では、農業そのものと観光、小売、文化、芸術といった様々なものをすべて融合・調和させるなかで村の強みを見出していくような施策が述べられていたが、五金花村の場合、経済発展の度合いが大きく、その分、農業の占める位置はかなり減退しているのではないかと感じられた。

五金花村の発展を、特に日本の「地域問題」に引きつけて考えると、いわゆる過疎高齢化や人口流出を「地域」の課題としてとらえる人々にとって、守りたいものは「自分の土地と自分の生活」なのか、あるいは「社会のための仕事（使命としての農業、人間としての生き方）」なのか、といった人の生き方にも関係してくる問題が垣間見えているのではないだろうか。これは、商店街における産業の盛衰と、まちづくりをどう考えるのか、といった問題にも繋がってくるテーマでもあるといえる。

明月村の場合、まだ多くの村民、特にもとから住んでいた農民の方々の話をまだあまりヒヤリングしていないのでかつに判断はできないが、少なくとも村の公民館で接したもともとの村民である若い方や、図書館にいた高齢者などに接したかぎりでは、村の人々は単なる経済発展ではなく、文化や芸術といった精神的なものの価値を強く感じているようであり、経済発展一辺倒のまちづくりではない、新たなタイプの持続可能なまちづくりを模索しているようにも見受けられた。

なお、中国農村調査の詳細については、別途、本学紀要に報告する予定である。

### (3) 比較検討としての日本での調査（徳島県神山町）

こうした2つのタイプの農村振興について、さらなる比較検討のために日本の農村で、



やはり一つのベンチマーク的な成功例として知られる徳島県神山町の調査も行った。

神山町は、30年ほど前に、NPO 法人グリーンバレーの創始者でもあり前理事長でもあった大南信也氏の展開したアーティスト・イン・レジデンスを始めとした様々な文化活動に端を発し、現在では過疎化の進む中山間部における移住者促進事業、空家対策事業の典型的な成功事例として知られるようになった町である。以前に何回か取材をおこなっているが、今回特に中国の農村との比較検討を行うために再訪し、NPO 法人グリーンバレーの現事務局長の竹内和啓氏、同 NPO 法人の事業であるアーティスト・イン・レジデンス活動の責任者杉本哲男氏にヒヤリングを行った。

神山町の NPO 法人グリーンバレーは、中国成都明月村とよく似た点として、芸術や文化を尊重するなかで外部の芸術家や様々な能力や職種の移住者を積極的に受け入れ、町の活性化や知名度向上に結びつけている。「創造的過疎」という言い方で、過疎化の進む中で将来の町の産業的自立を見据え、意識的に従来町になかった新たな産業の芽となる移住者を計画的に導入する手法を取っている。そのために、IT 関係者、映像クリエイター、パン職人、歯医者、フレンチレストラン経営者など多様な人々の受け入れと、「人」の尊重をうたい、最近では子育て世代向けのコンパクトシティ型集合住宅の建設も行っている。多様な人の尊重、外部人材の受け入れ、芸術・文化の尊重などによる村の活性化という点では、明月村と神山町は多くの点で類似している。

しかし今回のヒヤリングで特に興味深かったのは、もともと、そして現在も NPO 法人グリーンバレーの活動は、町の経済的発展を意図した活動ではなく、あくまで文化振興そのものにあるという点、そして活動が町の知名度を著しく向上した現在においても必ずしも町の大半の人が支持している活動ではなく、町の 98%の人々は無関心ないし批判的であるということである。NPO 法人グリーンバレーの活動で、この 20 年間に町に移住してきた人は数十人レベルに達しており、それなりに町の税収にも寄与しているわけだが、それでも必ずしも町全体の支持が得られているわけでもないという。大南氏等のイメージしている町の再生は、長期間に少しずつ町の中に新産業の芽を作り持続可能な町となっていくことであるというが、新産業は人々が自律的に生活を維持できるという程度のもので、町の経済発展を目指すというほどのものではない。実際に移住してきている人々の活動を見ると、例えば一年の大半を営業せずに外国に旅行にいつてしまうフレンチレストラン経営者など、明らかに経済合理性の追求や経済発展を目指したものではなく、むしろ独特の芸術的な価値観に基づくスローライフ的な活動であり、都市部における資本主義的競争社会へのアンチテーゼとも言うべき共生志向の生活実現が目的であると考えられる。

すなわち、神山町は、従来の経済志向の枠組みの中で町の持続性を志向するものではなく、むしろ非資本主義的なスローライフ志向の町を新たに創造しようとする動きのようである。但し、これも、一方で富裕層向け観光を意識しているレストランや都会での仕事を持ってきた IT 企業のように、基本的には都会の資本主義的経済発展をベースにしながら、補完的な活動をしているものと理解できる。従って、ある意味では成熟期に入った資本主義社会の都市補完型のまちづくりとして位置づけられるのではないだろうか？

中国の明月村が、こうした日本での動きも視野に入れながら、従来型の農村振興ではなく、近未来での持続可能性を意識した共生型コミュニティのようなものを志向していると

したら、さらにそのまちづくりの過程や工夫は、日本にとっても大きなインパクトを持つものとなる可能性がある。今後、こうした観点から、より詳細な調査と住民意識の解析などが必要である。

なお、現時点での本研究の詳細は、本学紀要および学術誌への投稿論文などにまとめられる予定である。

#### (4) 視察調査のまとめと今後の課題

中国成都市の4つの農村で、農家楽を中心とした産業振興の状況を視察した。その経済的な発展は眼を見張るものがあるが、同時に農村の開発には大きく分けて2種類のものが s ることがわかった。

- 1) 経済発展を主眼として、政府や外部の企業の資本を投下し、地元の農民は、極端な場合、土地を貸すことだけが収入源になっている場合もある。
- 2) 経済発展と地元の芸術、文化や農業も大切にし、外部からの人材を受け入れながら、芸術、文化や農業も観光などと結びつけ、一定の収入に結びつけている場合。

この2)の例と比較する上で、日本の徳島県神山町の事例を視察し、神山町の場合、資本主義的な経済発展のみを志向しておらず、スローライフ的な生活志向をもっている若い人が集まり、精神的な満足感を重視した緩やかな発展を目指していることがわかった。中国の事例も、こうしたことを意識している可能性があり、今後両国の事例をより深く研究することにより、両国での今後の産業発展やまちづくりの方向に示唆を得ていきたい。

#### 謝辞

本研究の遂行にあたり、中国での研究を支援してくれた西南交通大学の教授陣の方々、また中国各地の村で親切に対応してくれた村の関係者の方々に深く御礼申し上げます。また、日本国内での研究について協力していただいた、徳島県神山町の NPO 法人グリーンバレーの方々に記して御礼申し上げます。

#### 5. 本研究に基づく主な発表論文等

- 1) 平野真、張明軍「中国における農村調査研修-福知山公立大学での国際版 PBL 教育事例として-」2018年度福知山公立大学紀要掲載予定。
- 2) 「中国研修を実施しました」福知山公立大学 HP@2018.9.28
- 3) 平野真、中尾誠二、井上直樹「地域経営学における PBL 教育のフレームワーク-福知山公立大学での教育実践をもとに-」2018年度福知山公立大学紀要掲載予定。
- 4) 平野真「『ひとづくり』という錬金術(仮題)」2019年4月に丸善系出版社で刊行予定。

## 6. 参考文献

- 1) 陳桂棣、春桃(2005)「中国農民調査」文芸春秋
- 2) 江口伸吾(2006)「中国農村における社会変動と統治構造-改革・開放期の市場経済化を契機として」国際書院
- 3) NPO 法人グリーンバレー・信時正人 (2016)「神山プロジェクトという可能性」廣済堂出版
- 4) 深尾光洋(2006)「中国経済のマクロ分析」日本経済新聞社
- 5) 巖善平(2009)「農村から都市へ- 1億3000万人の農民大移動」岩波書店
- 6) 平野真、劉鳳 (2010)「グローバル連携による地域事業価値創造過程-日本と中国の花井関連事業事例から」組織科学、Vol. 43, No. 3, pp. 33-42
- 7) 方琳 (2015)「中国浙江省におけるグリーン・ツーリズム農家楽に関する研究-日中欧におけるグリーン・ツーリズムの比較から-」岩手大学連合農学研究科生物環境科学博士論文
- 8) 今永清二(1968)「中国の農民社会-その風土と歴史」弘文堂新社
- 9) 石田米子(1974)「中国の革命-農民のたたかひの歴史」評論社
- 10) 岩田勝雄・陳建編著(2005)「グローバル化と中国経済政策」晃洋書房
- 11) 川島博之(2010)「農民国、中国の限界」東洋経済新報社
- 12) 川島博之(2012)「データで読み解く中国経済」東洋経済新報社
- 13) 桂英、橋本卓爾、藤田武弘、山尾政博、細野賢治 (2010)「中国四川省における農家楽を中心とした農村振興-成都市近郊の「五金花」を事例に」(農業市場研究、vol. 19, no. 2, pp. 41-47。
- 14) 森下裕之、宮崎猛 (2008)「中国における棚田農業の保全と農家楽」農林問題研究、44巻、1号、pp. 256-261
- 15) 21世紀中国総研編(2016)「中国情報ハンドブック」蒼蒼社
- 16) 王文亮(2003)「中国農民はなぜ貧しいのか」光文社
- 17) 王文亮(2004)「九億農民の福祉-現代中国の差別と貧困-」中国書店
- 18) 大牟羅良(1958)「ものいわぬ農民」岩波新書
- 19) 大橋英夫(2005)「現代中国経済論」岩波書店
- 20) 李昌平(2004)「中国農村崩壊～農民が田を捨てる時」日本放送出版協会
- 21) 劉岩 (2017)「伝統的資源活用型観光地における観光客の意識に関する研究：中国成都市を対象として」山梨大学医学工学総合教育部博士論文
- 22) 劉 蘭芳 (2013)「中国における農村資源を活用した観光開発による地域活性化に関する研究-遼寧省における都市近郊農村及び中山間地域農村の意識調査を通じて-」東洋大学大学院 国際地域学研究科国際地域学専攻博士論文
- 23) 佐々木信彰編(1997)「現代中国経済の分析」世界思想社
- 24) 佐々木信彰編(2000)「中国経済の展望」世界思想社
- 25) 佐々木信彰編(2001)「現代中国の民族と経済」世界思想社
- 26) 篠原匡 (2014)「神山プロジェクト」日経 BP 社



- 27) 関満博(1996)「中国市場経済化と地域産業」新評論
- 28) 唱新(2002)「グローバリゼーションと中国経済」新評論
- 29) 高橋満(2004)「中華新経済システムの形成」創土社
- 30) 展 鳳彬 (2008)「中国の新型観光農家楽-四川省・成都市を事例に」同志社大学大学院  
政治経営 pp. 241-246
- 29) 塚本隆敏(2010)「中国の農民工問題」創成社